

---

# 召還する者と創り出す者

DEMIX.

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

召還する者と創り出す者

### 【Nコード】

N0637R

### 【作者名】

DEMIX .

### 【あらすじ】

一人の男が地球から排出され、リンバウムにて新たな生を授かり生きていく物語です。

こっちは筆休めに書くサモンナイト3の小説です。

もう一つ書いているネギまの方がメインなのでこっちは更に更新が遅いことが予想されます。

そんな小説でも良いと言ってくれる人がおりましたら覗いてみてください。

恋愛は一人一途になるか、ハーレムになるかはまだ分かりません。

(恋愛は物語において必要な物だと捉えているので入れます)

つていうのは建前でニヤニヤしたいだけですサーセンw

たぶんハーレムになると予想。

## プロローグ（前書き）

本編に詰まったとき、ふと書きたくなつたときの憩いの場です。  
ゆったりまったりのくんびりって感じで書く予定です。

## プロローグ

一人の男の独白

俺は物の本質がわかる。

それは、人が嘘を付いている、こいつは悪人だとか見破ることが出来るわけではない。所詮そんな人は人並みだ。

別に俺が人より優れていると言いたいから見栄を張っているわけではない。そんなもんそこの野良に喰わせてしまえ。

まあ何が言いたいかというと、俺は物の造りがわかる。それは《<sup>リアル</sup>現実》、《<sup>フェイク</sup>幻想》を問わずだ。

例えばそうだな・・・《現実》の例では、ここに一つの拳銃がある。それを素人が見て、触っても内部構造など分からないだろう。しかし、俺はそれを見ただけで頭に『<sup>パース</sup>設計図』が思い浮かぶ。

《幻想》の方では・・・そうだな、みんなの好きなロボットアニメを思い浮かべてくれ。ガンダムでもグレンラガンでもマクロスでもマシンガンでもゲッターでも何でもいい。そいつらをテレビで見るとする。その映像を見ただけでそいつらも『<sup>パース</sup>設計図』が思い浮かぶ。必要な素材もだ。

しかし、超合金Zやガンダニューム合金なんて物は此の世にない。その時にその世界にあるもので補うように変更される。それによる弊害もちゃんと分かる。

さらには、物の定義として、生きている・・・これでは語弊があるな・・・心がある？ これだな。心のあるものの『<sup>パース</sup>設計図』は浮かんでこない。

長々と話してきたが、そんな俺が物創りが趣味（ここでは創ると言わせて頂く）になるのは当然の結果だろ？

（白き部屋）

目を開けるとそこには白い空間。何も無い空虚な空間。  
そこには美しい女性と俺が立っている。

「目は覚めましたか？」

女性が俺に問う。

「ここは？どうなってんだ？」

ぶつちやけ意味が分からない。それに俺が”俺”であるはずの物が  
ない。云わば”俺”の体である。  
そう・・・言い表すならば正に、靈魂の状態である。

「随分落ち着いていらつしやいますね。普通こんな状況になったら  
嫌でも落ち着くことなんて出来るはずが無いのに」

そう言われてもな・・・。

「俺は何事も冷静に、ポジティブに、何があっても諦めるなって教  
わっていたからな」

何故か酷く曖昧にしか思い出せないが……。それはこの状況が原因なのだろう。

「では本題に入らせていただきます。あなたは本来の住人であり、の住人ではない。あなたがに生を受けたその時から、は歪み始めました。」

所々が聞き取れない……。どうしてだ？

「ああ、言っている意味が分からない……。というよりも聞くことができないようです。まあここはいいでしょう。あなたは、これから本来生を受けるはずだったインウに生れ落ちてもらいます。」

少し聞こえてきたけど……。さっぱりだ。

「そのままインウに行き、そこからの行動はあなたの自由です。ああ、きにいた時の知識は引き継がれるようです。混乱が無いように今この場で話していることも……。しかし残念ながら親のことは思い出せないようです。」

「それは……。なぜ？」

「リインバウすら歪んでしまう恐れがあるからです。しかし、ちきで得た、又、その上その目で手に入れたことを使って……。俗に言うオーバーテクノロジーを造っても、使ってくださいっても構わないです。」

そんなことを話していると俺の体が不意に光り始めた。どうやらお別れの時間のようだ。

「リンバウムでの生は紛れも無いあなたの人生です。あなたの人生に果て無き幸福を・・・」

綺麗な女性だからこれでいいだろう。

「ありがとうございます・・・女神・・・さ・・・m」

こうして俺は地球から消えた・・・。そしてリンバウムに生を授かることとなった。

t o b e c o n t i n u e .



## プロローグ（後書き）

さてはじまりましたサモンナイト3の小説。

ぶっちゃけ見切り発車の小説ですのでこの先どう進むのか予想すらできません。（主人公の名前すらまだ決めてませんしw）

前書きに書きましたように。こっちはサブなので更新は遅いです。それでもよければよろしくお願いします。

主人公の意識がまだはつきりしていないので暗いように感じますが、明るい性格にする予定です。

感想、誤字・脱字等がありましたらよろしくお願いします。

どうしよう……召還する者の出番が終わったw

伏線にでも考えようかな？

赤ん坊になりました。それでも僕は元気です。（前書き）

さすがにあれだけではあれなので（あれってなんだよ・・・）（汗）  
投稿します。

赤ん坊になりました。それでも僕は元気です。

何かが 聞こえる……。

優しく包まれるような…… そんな声が……。

て

また聞こえてくる……。

誰だろう……。

きて

きて……？

起きて

その声と共に俺の意識は浮上した。

「やっと起きたみたいね。寝坊助さんは」

目の前には綺麗な女性の顔があった。

女性は俺を見ると綺麗な笑みを浮かべた。

この人誰だ？こんな綺麗な女性を俺は知らないぞ？  
ていうか俺の今の状況はどんな状況だ？つてもしかして抱かれてる  
のか？！

「ア……ア……」

声も出せねーし！しかも視界もピンボケしてるみたいに見えねー……。

考えたくないようだが……俺……今赤ん坊！？

いやいやいや！思春期に少年から大人に変わるのなら分かるけど青  
年から赤ん坊は聞いたこと無いぞ徳 さん！！

もちつけ、もとい落ち着けkoolだ！そうbe cool！

でもこれはないだろう……。思い出せ。何があった？

俺は大学生だったような？発明好きの。

そういえば夢を見たな……。そうだ！それで綺麗な女神様に出会っ  
たんだ！それで確かリンバウムで生きるとか言われたな。

「そうだ！ご飯にしましょう？」

俺が考えを巡らせていると女性がそう提案してきた。まあ声が出せ  
ないから返答なんて出来ないんだけどな。

女性が俺を布団に寝かしどこかに出て行った。その間に目を周りに  
向けてみたけど見つらいことこの上ない。

首も動かせないし、周りも全然見えやしない。分かることは寂<sup>さび</sup>れて  
いるということぐらいだな。

「じゃあアツシユ、食べよっか」

俺ににぱっと笑いかけてきながらそう言ってきた。俺の新しい名前はアツシユらしい。

ていうかやつぱり俺はミルクなんですか……。なんとなく予想してはいたけど辛い……。こんなんでやっていけないのか？

俺は今後の苦勞しそうな未来に思いを馳せた……。

・ ・ ・ ・ ・

くそして時は流れる

キングクリームゾンじゃないよ？俺はしっかり生きてきたよ？ボスなんていないよ？何があったかは心の奥底にしまっておくことにしておこう……。

排出物の世話とか……死ねるね……。

今まで生きてきて分かったことをここに記しておくことにしよう。

この世界はリンバウムという世界であっているようだ。地球という世界は聞いたこと無いらしい。

母親（マリアという名前らしい）とは血は繋がっておらず、拾われ

たらしい。因みに母と呼ぶことに躊躇ためらいはなかった……母性が強いからか？

両親はおらず、俺を拾って孤児院を開きたいと思ったらしい。しかし、財政が貧しいので要考え中である。

このリンバウムでは召喚術というものがあるらしいが母親は使ったことがないようだ。

俺の目はそのまま記憶もあるので創り出すことが可能のようだ。

5年生きてきて分かったことはこんなところだ。

俺のすることは物を造って売ることかね？母の夢も叶えてあげたいし……親孝行は大事ですよ？皆さん。

というわけで俺は密かに地下に工場作ってました まる

いや〜本当に大変だったよ……。母がぼぼわした人じゃなかったら絶対にばれてたね。

庭をドリルで掘って「砂遊び？」とか聞いてくるとは思わなかったぜ。因みに材料はスクラップ上から拾ってきたよ？エコだしプラ

イスレス。お金で買えない価値がありそうだな……。まあ造る物は日用品かね？アイロンとかミシンか？

この世界、リンバウムの他に四つの世界があつてそこから召喚中を召喚している。一つは『機界 ロレイラル』、二つ目は『鬼妖

界 シルターン』、三つ目は『霊界 サプレス』、四つ目は『幻獣界 メイトルパ』がある。

他にも名も無き世界というものあるらしいけどよくわかっていない。そのうちのロレイラルの恩恵があるのにも関わらず技術力はそこまですぐで高くないようだ。

だから、俺が見つけた腕利きの商人に売ってもらってるんだ……。

いやくまさかここまで売れるとは思わなかったね。さすが商人！俺のことをガキだからと見下したりせず、対等に見てくれるしな。こんな商人に出会えてラッキーだったぜ……。

side 若い商人

こんなことがあるんだな。

あれはそう、たまたま街を歩いていたときだ……。

特に当ても無くぶらぶら歩いていたときに一人の少年が話しかけてきたんだ。

いや別に話しかけられることが珍しいと思ったわけじゃねえんだ。

子供なら尚更だ。

でもその少年は俺に向かって、「商売を手伝ってくれない？」って言うてきたんだ。

確かにその日は道具もたくさん持って歩いていたから、商人だと分かるのはいいだろう。けどな、その俺に向かって商売を手伝えとはどういうことだ？

まずはじめに警戒心が出たよ。子供ってというのは無邪気ゆえに、又は生きるために悪に手を染める。こいつもその類かと思っただがよ、話を聞いてみると自分の発明品を売ってほしいと言ってきたんだ。

遊びかと思つて適当にあしらおうと思つたんだがよ、設計図とか完成品を見せられたらそんな思いは無くなったよ。

少年が見せてきた商品はこの世界にまったく無い技術で出来てよ、これは売れると思つたんだ。それならば子供も老人も関係ない。商売をするだけだ。

少年と商談を交わしてみるとよ、こいつ全然子供つて感じじゃねえんだ。同年代の男と話してるみたいだったぜ。(言葉遣いとかは子供っぽいんだけどな)

それで最後にどうして俺に話を持ち込んだのか聞いたらよ……。

「ん、強いて言うなら……勘？」

とかの給い<sup>のたま</sup>やがった。こいつには勝てないと思いつつ、いい取引が出来たと思つたよ。

side out

そんな感じに商売してもらつていたらかなりの金を手に入れられたぜ。因<sup>ちな</sup>みに匿名にしてもらつてるぜ？色々面倒だしな……。

これで家もリフォームして孤児院も開けるぜ……問題はどうかやって金を母さんに渡すかだよな……。

まあそれなりに稼げてるから新しい物造りつつ趣味のほうにも手を出してみるか……。

ハーリーはそんな子供とは思えない思いを巡らせつつ物思いに耽<sup>ふけ</sup>



の  
だ  
っ  
た。

赤ん坊になりました。それでも僕は元気です。（後書き）

今回はここまでです。

誤字・脱字、感想等がありましたら気軽にお願いします。

やったね妙ちゃん家族が（おいやめる）前書き（

ちまちま投稿）

タイトルはあれです……調べると鬱になります。グーグル先生に頼るのはお勧めしませんw

やったね妙ちゃん家族が（おいやめろ

』とある少年の日記より』

みんな！集まってー！アツシユく（ここから赤黒い色で塗りつぶさ  
れている……）

と、まあこんなテンションのみんな大好きアツシユさんだよ！  
生まれてから色々あった訳ですが、今回はなんと家族が増えたお話  
について話しま〜す！  
実は前回のお話の後に三人の家族とロボ、番犬が家族に増たよ！  
それを綴<sup>つづ</sup>っていくよ！

〜少女カリンとの邂逅のお話〜

俺は今唐突だがロボを創っている。なんかこのロレイラルにも機械  
兵士ってのがあるらしいけど、そんな戦闘特化でなくてなんていう  
か……そう！メイ…、家政…、新しい家族だ！

ちょっと趣味思考がボロボロ出てたけどそんな感じ。創ってはいるんだけど肝心のAIがまだできてないんですよ。

フォルムは俺の目で見て覚えた物で創ったんだけどさあ…… AIは俗に言う心の部分だからねえ？（心臓違うよ？どっちかって言うと脳？）

むっん……こんな行き詰っている時には気分転換に限る！

「母上様〜ちよっち放浪してくる！」

「ちゃんと夕飯までには帰ってきてね〜」

……色々とスルーされてしまった。切ない……（・・）

この悲しみを胸に一曲引かせていただきます。実は俺、オカリナ吹けるんだぜ？

曲は知ってる人は知っている曲……とでも言わせて貰おうかね？

テツテレレレーレ テーレツテレー

〜少年吹き歩き中〜

ニャー

ワオーン

カー

パオーン

ブニャー

パオーン？ブニャー？！ ふっ、俺としたことが色々な動物に好

かれちまったぜ！

でもいつまでもこのままでいるわけじゃないのよ？

「今日はここまで、みんな！解散しろ！！お前たちは気をつけて（動物園に）帰れよ！」

一斉に散っていく動物達。いや〜ちゃんと言つこと聞いてくれるから動物はいいね！

それに比べて腐った大人達は……やれやれ（クイクイツ

「なんだ？まだ残ってたのか。今日はもう解……さ……ん？」

「もうお終い？」

あ………ありのまま今起こったことを話すぜ！

『おれは解散を命じたのに甘えたいために残っていた動物が服を引っ張っていると思って振り向いたら少女だったぜ』

な………何を言っているのかわからねーと思うがおれもどうしてこうなったのかわからなかった……

頭がどうにかなりそうだった……

催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃだんじてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

「ねえ！ もうお終いになっちゃったの？」

「あ……ああ、今日はもうお終いだ。悪いな」

「そっかー。残念」

そう言っただけで本当に残念そうな顔をカリンはしている。  
その少女を良く見てみるとボロ布を纏まとっただけのような格好をしていた。

「そこな少女よ、お前の名前は何て言うんだ？ 俺の名前はアッシユって言うんだ」

「え？ 私の名前？ 私の名前はカリンって言うんだ」

「そっか、じゃあカリンは何処で暮らしてるんだ？」

「私はあそこで暮らしてるんだ……」

そう言っただけでカリンが指差した場所は、路地裏だった。  
それを聞いてしまったらさすがに放置はアッシユには無理だった。

「そっか……他にも誰か？」

「ん〜ん、私だけ」

カリンは暗い顔をして返答した。

年端もいかない少女がこんなところで暮らしてるって……。

本当に世の中は理不尽だよなー糞！

「そっか……じゃあさ、うちに来ない？」

「え？」

「ここに暮らさなければならぬ理由なんて無いでしょ？じゃあうちに来て一緒に暮らそうよ」

笑顔に向けて言ってますよ！ 不安にさせないためにです！

「本当に……？ 行ってもいいの？」

「もちろんだ！ 母さんも歓迎するぜ！ よし、こうなったら善は急げだ！早く帰ろう？」

「……うん！！」

カリンは眦まなじりに涙を湛えているが、笑顔で答えた。

・  
・  
・  
・  
・

「ただいま、母さん」

「お邪魔します……」



お邪魔しますってカリンさん。

「違うよカリン、ほら」

「……ただいま」

「上出来！」

そう言って頭に手を置いて撫でる。

いや〜結構良いもんだねこれ。癖になりそう！

「お帰りアツシユ、この子は？」

「拾ってきた新しく家族になるカリン！」

「拾われてきたカリンです」

「そっか、じゃあお風呂に入っでご飯にしよう？」

いやいや母上様、そんなにあっさり……。

まあ母さんが断るわけないか。金も今はたくさんあるし。

「じゃあみんなでお風呂に入ろう？」

「いやいやいや！ 俺は遠慮しとくよ!!」

「そっか〜、残念。じゃあカリンちゃん行こう？」

そう言っつて母さんはカリンの手を引いて行った。

ていつか俺が間違ってるのか？いやしかし俺は精神年齢なら青年の

域だからな……。

こんなこと考えてても仕方ないか。なんとなくヒントも掴めだし、AI創りにでも取り組もうかね。

『風呂場での一時』

side カリン

今日私は拾われてきた。動物の群れが出来ていたから着いていったらその先に私とあまり年の変わらない少年がオカリナを吹いていた。少したって解散してしまったので、少年に話しかけてからどンドン展開が代わってしまって、今の私は軽いパニックになっているのかな？

でもこれだけはわかる。私は少年とこの目の前にいる女性に救われたんだと言うことが……。それにこの気持ちは……。

「じゃあ遅れたけど自己紹介しよっか。私の名前はマリア、よろしくね？」

「よろしくおね」敬語じゃなくて良いよ？私たちは家族になったんだから「……よろしく！」

優しそうな女性だな……。年も若いし。本当にアッシュのお母さん？その柔らかな雰囲気の後押しされて色々とマリアに聞いてみた。

そして解ったことは、マリアとアッシュは血が繋がってないということだった。けれど本当の家族と同じように……。もしくはそれ以上の仲のよさだと言うことだった。

「お母さん」

「うん？何？」

「このお母さんと言つのも、そう呼んでいいと言われたから……  
風に呼んでる。」

「アツシユって彼女いる？」

「いないと思っけど……どうして？」

「いや……これはチャンスかな？」

「ふふ……そっか。私は特に反対も何も無いから自分の心に素直に  
なりなさい？」

「ありがとう！」

アツシユは彼女がいないのか……。お母さんが言ってくれたように、  
私は私の好きにしようかな？

side out

なんか寒気がしたぞ？ 気のせいかな……？  
まあいいか。そろそろ風呂が空く頃かな？ AIの方も区切りがいい  
し、今日はここまでにしよう。

アッシュは風呂に入るために片づけを始めた。

アッシュ7歳、カリン5歳の出来事だった。

少年ロイと少女ベルとの邂逅

『とある路地裏にて』

side 三人称

「ベル！ 大丈夫か？」

「ハア……ハア……うん」

暗い路地裏を二人の兄妹が疾走している。その後ろには黒い服を着た二人の男。

傍から見たらただ事ではないのは一目瞭然いちもくりようぜんであろう。しかし、路地裏なので、いるのは精々猫ぐらいものだろう。（虫などをカウントしなければだが）

「畜生！ 何だってこんな……とにかく逃げるぞ！！」

少年は息巻きながらそう捲くし立てると、少女の手を取り尚も走り続ける。

少年はわかっているのだろう。逃げ続けても意味は無いことに……。しかし、そうするしかない。

一介の少年では、そうすることしかできないのだから……。

「アッ！ 痛い……」

「大丈夫か！！」

遂に少女が力尽き倒れてしまった。元々大人と子供では脚力が違うのに無理して逃げ続けたのだ。

褒めこそすれ、文句は言えないのだろう。少年もそこをわわっているのか、焦ってはいても心配することをやめられないだろう。

「やっと追いついた！ 糞餓鬼ども！」

そして、大人たちに追いつかれて手を掴まれ、その場から連れてかれるその瞬間に、場違いな少年の声が響いた。

「これこれ其処の御方達。子供に乱暴はいかんよ」

……口調は変だったが……。

side out

なんか怒鳴り声が聞こえてきたから覗いてみたら、子供二人が連れて行かれそうになってんぞ？

ここで見逃すのは大人として無理だな！（アッシュは子供です。本当にあーり）

「これこれ其処の御方達。子供達に乱暴はいかんよ」

そう声をかけると明らかにヤのつく職業の人達がこちらを振り向いて困惑している。

まさかこの場面を見た子供が落ち着き払った声で話しかけてくるとは到底思わなかったのだろう。

「いやあのね？ この子達の親が捜してるから連れて行こうと思っただけで、ごねてたからしかたなくね？」

関係ない子供だから言い聞かせるようにするってことは話が通じるみたいだな……。

ならば秘儀！ お金（話し合い）で解決しよう……なんか本音と建前が逆になった気がするな……気のせいかな？

「いや、誤魔化さなくて良いですよ？ いくらで子供達を売ったんですか？」

おーおーおー、吃驚してんね。まあ10歳そこらの餓鬼がこんな話は普通しないからな……。

「貴様、何者だ？」

「いやいや、私は何処にでもいる子供ですよ？ それよりいくらですか？」

「……一億 <sup>バーム</sup> bだ」

「話がわかりますね。その値段で買いましょう」

「ありやま、またおどろいてんね。」

「子供たちまで驚いた顔してるな。人身売買なんて本当はやりたくないんだがしかたないよね！」

「そう言っただアッシュは懐から携帯を取り出した。」

「そう言えばこの世界は携帯電話ないんだよね。しかたないから家に電波塔モドキをつくったよ！」

「少々お待ちを……もしもし？ 俺俺！ そうアッシュだよ！ 今から言っところにお金持ってきて。一億ね。うん、うん、悪いね」

「何をしてたんだ？」

「ちょっと家族に連絡を。すぐに届けられると思うのでちょっと待っててください」

「俺俺詐欺の意味ないね？ だって電話が普及してないもの……。」

「そのままちょっと待っていると、カリンがアタッシュケースを持ってやってきた。」

「アッシュ！ 見ての通り持ってきたけど……」

「よくやった妹よ！ ではこれを確認してください。」

そう言つて男達に渡してやった。本物の金だからじつと見んといてく。え？ 確認ぐらいするだろ？ ですよね。

「確かに受け取った。金を払えばあなたは客だ。今後とも御贖<sup>ごこい</sup>肩に！」

そう礼儀正しく言つた後、男達は帰っていった。（その後ろで逃げていた少年は舌を出してあつかんべーしていたが……）

「さて……と、俺の名前はアッシュ。そして、こっちがカリン。君たちの名前は？」

これがファーストコンタクトだ。少年は考え込んでるし、少女はオロオロしてるし……どうしたものか。

「……俺の名前はロイ、そしてこいつが妹のベルだ。お前達は俺達にどうして欲しい？」

「そんなに喧々（けんけん）しなさんな。俺達の要求は君たちに家族になつて欲しいんだが……どうだ？」

おどろいてんね。今日みんな驚きすぎじゃね？ いやまあしょうがないっちゃんしょうがないんだが…… お前が原因



そして少年よ。そんなに考え込まなくても良いんじゃないよ？ お前が原因

「本気か？ 俺達は売られたんだぞ？ そんな奴を家族にするなんて……」

「別に家族になるのに理由は要らなくて？ 家族と認めたらもう家族だろ」

ん？ よう…少女が兄の袖をひいてんぞ？

「信じてみようよお兄ちゃん」

「そつか……お前が言うなら……な」

なんか大人だね、子供らしくいこうぜよ！

「よしよし、それじゃ俺が長男でロイが次男、カリンが長女でベルが次女だな！ こうしてらんない！ 母さんに報告してくる。（かりん、こいつらの心を解してくれないか？ お前も境遇は同じだろ？）」

「（わかったよ）じゃあ先に行つて？ 私達はゆっくり向かうから」

「委細承知！」

後はカリンに任せれば大丈夫だよな？ そうと決まれば歓迎の料理を母さんと一緒につくんねーと。

side カリン

「じゃあ行くっか？」

やっぱり緊張してるね？ アッシュに頼まれたし……どうしようか？

「そっだ、二人に昔話をしよっか。あれはそう……」

二人とも急な話に吃驚したけど私の話を聞いてくれた。  
そして、わたしも拾われたって事を言ったら驚かれた。

「カリンさんh」

「カリン。それがお姉ちゃんとか…姉貴ってのもいいね！」

「…姉貴は……いや、なんでもない」

「そっか……ベルもお姉ちゃんって呼んでね？」

「あの！ えっと！ お姉ちゃん……」

「初々しいね、素直な子は好きだぞ？ さて、アッシュもお母さんも待ってるだろうし……行く？」

私の仕事はここまで。後は順々にね？

side out

「ただいまー！」

「……ただいま」

「えっと！ えっと！ ただいま……」

お？ やつと帰ってきたか。うん！ 二人ともいい顔してるね？

「あらあら。あなた達がアツシユの言ってた子達ね？ 私の名前はマリア。私のことはお母さんって呼んでね？」

さっそく母さん二人に打ち解けてんな……。まあなんかそんなオラいつも出してるしな……。

「母さん、話すのも良いけど先にご飯にしようぜよ！」

「そうね〜。そうしょっか！」

そう言っつて台所に行こうとしたところでロイが今までのことを振り切るように大きな声を出した。

「これから……これからよろしくー！」

俺達は驚いたけど、その後直ぐに、みんなの笑顔がはじけた。

アッシュ10歳、カリン8歳、ロイ7歳、ベル5歳の出来事だった。

その後色々なイベントがあったけど、一番大きいのはロボットと番犬を創ったことかね。

カリンもロイもベルもみんな頭が良いから一緒に色々考えて創ったよ！

ロボットの名前はアイギス！ ペル3に出てくる奴をモデルにするよ！ AIもしっかりしてるし、人間といっても過言ではない！ それと番犬は種に出てくるラゴウをモデルにして創ったよ！ こいつもロボとは思えない知能だから可愛いぜ！ 頭なでも堅いのが少し残念だ……。

そんなこんなで家族がたくさん増えたよ！ やっぱり家族は沢山いた方が楽しいね！

やったね妙ちゃん家族が（おいやめる）後書き）

というわけで家族編でした。

番犬をなぜラゴウにしたかというところ好きだからです！ EVでも良  
く使ってるしね…。

後何話か挿<sup>は</sup>ん<sup>ん</sup>だら軍学校編にしようかな？

誤字・脱字、感想等がございましたらよろしくお願いします。

日記つてよく考えてみれば黒歴史帳じゃね!?(前書き)

暇がない

日常編

今回は会話増し増しです!

日記つてよく考えてみれば黒歴史帳じゃね!?

side ベル

初めまして。私の名前はベルと言います。

今日は私とお兄ちゃんを引き取ってくれたアツシユお兄ちゃんの日を綴ってみます

く5:30 起床く

アツシユお兄ちゃんの

朝は早いです。この時間に起きてるのはお母さんだけです。

身支度を整えて走りこみをしているみたいです。理由を聞いてみたところ

「体力はあつて困らないし……な？ 追っかけられたときとか……  
(カリンから……な)」

なんか頬を掻きながら答えてくれたけど……後半聞き取れなかったし、苦笑してたのは何でかな？

く6:00 朝食+ く

私達は基本皆でご飯を食べます。身支度を整えて私も居間に6:30頃には座っています。

この時にお兄ちゃんは起きれない事が多いので、アツシユお兄ちゃんが起こしに行きます。

「おきる〜、おきないか〜、おきなさい〜……警告はしたぞ？ 秘儀！ 死者の目覚め！！」

カンカンカンッ！！

「ニギヤアアアア！」

……毎回思うんですけど、お兄ちゃん、猫の尻尾を踏みつけちゃった時みたいな声を上げてるけど大丈夫なのかな？

〜7:00 機械弄り〜

私達は皆で機械を創ったりします。アツシュお兄ちゃん曰く私達は皆頭がいいそうです。

「ロイ、其処のスパナ取ってくれ」

「はいよ」

「サンキュー、ついでにモンキーレンチも」

「はいはい」

「更についでにパンとジュース買って来い」

「はいは……って俺はパシリか！！」

「え〜？ だってロイお使って感じがしない？」



「な・ん・の・は・な・し・だー!!」

「ベル、こっち手伝ってくれない?」

「わかった!」

お兄ちゃんとアツシユお兄ちゃんは仲がいいみたいです。  
私はカリンお姉ちゃんと特に仲がよくなりました!!

〈12:00 昼食〉

お昼ご飯も朝ご飯と同じで、皆で揃って食べます。

「アツシユ? 今日はこの後どうするの?」

「そうだな、母さんは?」

「私はお掃除でもしようかしら?」

「手伝おっか?」

「アイギスがいるから大丈夫よ」

「そっか、アイギス、頼むな」

「了解であります」

「と、言うわけだ。皆の衆、邪魔しないようにな! ロイとかロイ

とかロイとか」

「なんで俺だけなんだよ!」

「胸に手を当てて考えてみなさい。カリンとベルとラゴウが母さんの邪魔すると思つか?」

「まあそうなんだけどよ……だからって俺を指すのはどうなんだよ」  
「!」

「なんか哀愁漂わせてたからな……」

「させてねーよ!……」

「こらロイ、食事中に叫ぶな」

「あ、わり……叫ばせてんの兄貴だろ!」

「まあまあ、俺の考えたモケーレ・ムベンベってことを教えてやるか」  
「あ、」

「意味わかんねーよ!… モケーレ・ムベンベってなんだよ!」

「コンゴ・ドラゴンってこの方がいいのか? も、仕方ないな」

「だから何なんだよ!」

本当に仲がよさそうです。

アツシユお兄ちゃんは午後になると遊びに行くことが多いです。  
近所の子達とも仲が良くて……えっと……ガキ大将……って言うんで  
したっけ？

そんな地位を獲得しています。

「よしお前ら、今日は何すっか？」

「アツシユが決めてよー！」

「アツシユの教えてくれる遊びは面白いからな！」

「確かに兄貴の遊びは楽しいけどな……どーせ遊びのことしか考えて  
ないからだろーけどな」

「何を言つかねロイ君よ！ その通りに決まってるじゃないか」

（ …… ） <ドヤッ！

「何誇らしげに言ってるんだよ……てかその顔ウゼエ！！！」

「こらロイ！ 兄に向かってウゼエなんて言葉を使うんじゃない！

やっべ、俺超カッコイイ！」

（ …… ） <ドヤドヤッ！

「だからその顔やめろおおおおお！！！」

「さて、ロイ君はほっというて何しよっか？……クイズなんてどう  
だ？」

「面白そうだからそれをしようぜ!」

「確かに!」

「わかったよコイル君にデビット君。それにしても他の子が風邪とはついてないね……君達も気をつけるように!」

「「わかった!」」

「準備するからちょっと待ってて。取りに行くぞロイ」

「はいはい、解ったよ」

〈10分後〉

空き地にはなにか机とボタンがあるものがセットされています。確かあれはアッシュお兄ちゃんが、いつか使うかもしれないって言って創ってたやつだっけ?

「遂に始めました私の私による私の独断で行うクイズ! 略してどっくい!! をはじめます。」

「回答者はコイルとデビットだけだな……」

「それではルール説明をしていきます。まずこのクイズは順番に一つずつ回答してもらいます。そして、このクイズは何と……早押しです」

「え……? 順番に答えるんなら早押し入らなくね? 一体何を競

うんだよ!？」

「お手つきなんてややこしいルールはありません。でもお手つきとかは嫌ですね、まあ嫌ってだけなんですけど……感じが悪いですね」

「ないのかよ! ならその説明要らないだろ!？」

「先に三問正解した方の勝ちです。それでは決勝戦を始めます」

「決勝戦!？ 一回目なのに!？」

「それではコイルさんに問題です。 出題者である私の名前は…

…アツ…?」

「…え? ……………シュ」

「正解! でも少し遅かったですね。もう少してタイムオーバーでしたよ。タイムオーバーありませんけど」

「ないのかよ!?!」

「まだまだだな、コイル! 俺の方が早く答えてやるぜ!?!」

「それではデビット君に問題です。軍人が主に使う中距離で役立つ細長い武器は……」

「(さっきのもそうだし今回も簡単すぎんだろ……答えは槍だろ?)」

「

「槍ですが、槍で切られると?」

「痛い!」

「正解! 危なげない回答お見事です」

「えええええええ!? 槍のフェイントはまだいいよ! でも答えが痛いつてどういうことだよ!」

「ではコイル君に問題です。これから言う文字の順番を並び替えて人名を答えてください。それではいきます。デ…ビ…ッ」

「デビット!」

「正解! 問題全部出る前に答えてしまうなんて凄すぎます!」

「やるなコイル!」

「へへーん! 僕だって出来るんだぞ!」

「いやいやいやいや、並び替えだよなこれ? 一個も並び替えてないってどういうことだ! こんなんじゃ終わんねぞ!」

「そう思いますよね? しかしなんと、さっきの問題……………1ポイントです!」

「え? 今までは何ポイントだったんだ?」

「1ポイントです」

「え？ 今まで1ポイントで、今のが？」

「1ポイントです。コイル君に贈呈されます」

「え？ チョッ!？」

「次はデビットさんへ問題です。驚かないで下さい。何と次の問題を正解すると……1ポイントです」

「え!! マジかよ!!！」

「デビットお前は何に驚いてんだ!！」

「では問題です。マリアさんを母親に持つ家の子供の長男は……アツシユですが、木曜日に長男をしている人は？」

「アツシユ!!！」

「正解！ いやゝ引つかからずよく解けました!!！」

「もう問題の体を保ててない!？」

「それでは最後の問題です。最後の問題は本当に早押しです。それではいきます。ロイの妹であるベルはロイのことを普段どう思っているでしょう?？」

「財布!！」

「先に生まれただけの人!！」

「よしよしお前らが俺のことをどう思っているのかよくわかった  
！！」

「お兄さん！」

「正解！ 優勝は何と……コイル君です！」

「おめでとうコイル！」

「ありがとうデビット君！」

「もう好きにしろ……」

楽しそうにしていたけどお兄ちゃんが疲れてました。

〈18:00 晩御飯〉

晩御飯も皆揃って一緒に食べます。やっぱり家族の団欒は良いですね！

「あ！ 兄貴それ俺の！！」

「フツ！ 戦場ではその油断が命取りになるぜ！」

「なんだアツシユ、欲しかったら上げたのに……その代わりアツシユを食べさせ……」

「カリンさんや……その先を子供が言っではいけませんぜよ！」



「ねえお母さん、カリンお姉ちゃんが言ったのってどういう意味？」

「あらあら　まだベルちゃんには早いわよ」

他の皆にも聞いてみたけど誰も答えてくれませんでした……なんでだろ？

〈20:00　子供会議〉

「これより子供会議を始めます」

「はい！　アッシュ会長」

「なんだねカリン君！」

「今日も楽しい一日が過ぎせた！　だからこの後も、最後までいい一日にするために私の部屋に来て？」

「却下します。そのお誘いは嬉しいですが、子供が言うことではありません。では次にロイ君」

「今日もいつもと同じで平和だったよ……ああ……いつも通りで兄貴に振り回される一日だったよ……」

「それはいいことだ！　これからも励むように。最後にベル君」

「今日も楽しい一日だったよー！」

「うむ！　善き哉善き哉。では本日は特に議題も無いのでこれでお

「終い！」

この家では子供会議を特別な用事がなければやっていきます。なんでも、こういうことをしておけば家族のことがもつと解る様になるからだそうです。

〈21:00 就寝〉

私は大体この時間に寝ます。みんなも大体そうだけどアッシュお兄ちゃんは違うみたいです。早起きしているので、健康に気を付けてもらいたいです。

それでは皆様、お休みなさい。

日記つてよく考えてみれば黒歴史帳じゃね!?(後書き)

いや〜大変でした。今回の最後まで書いてたら半ばまでデータ吹き飛びましたorz

＼(。ロ＼)ココハドコ? (ノロ。＼)ノアタシハダアレ? もう一瞬こんな感じにwwww

アイギスさんを入れたかったけど話を書いてたら一言だけに……あれ?

クイズのところはニコ動のとある動画をパクっています。面白いので探してみてください。

めだか194様。誤字の指摘本当にありがとうございます。

誤字・脱字、感想等がございましたらよろしく願います。

優しいお父さん……尻に敷かれるんですね解ります(前書き)

久しぶりに更新

暑いね

眠いね

死にたい…w w w

優しいお父さん……尻に敷かれるんですね解ります

「じ、じじじじじじに、…緊急かつかか会議を開催しししsss  
(ry」

「おい！ 兄貴いったいどうしたんだよ！」

「今日のアツシュお兄ちゃん変だね？」

「確かにそうね……」

周りの議員が何か言っているがそんなことはどうでもいい！

今日は特大のニュースがあるからな！ 因みにニュースは英語だと  
new”s”で濁るんだぜ！！

つて、そんな事考えている場合じゃねえ！

「今日の議題は……これだ！！」

＼ババーン／＼ババーン／＼ババーン／

「母さんがどこかの馬の骨とイチヤラブしているらしい！？in  
マリア孤児院！！」

「なんだよこれ！？ 無駄に凝った装飾がされてるし……」

製作期間三日の徹夜だぜよ

母さんが楽しそうに男と話してるの見てから不眠不休だからやばい

……

「あゝクラクラする……」

「じゃあ今日はもう寝る？ 私の腕のな・か・で」

「さてやるぞ直ぐやるぞがんばるぞ」

「アツシユお兄ちゃん大丈夫？」

「ありがとうベル、君のおかげで頑張れるよ」

ベル……君は何てええ子なんや……。俺の事を純粹に心配してくれるのは君だけだよ（ホロリ）。  
ロイと血が繋がってるとは到底……。

「あ？ 何じつと見てんだよ」

「いやいや、ツンデレさんだから繋がっているか……」

「何がだよ！！ 一人で納得してんじゃねー！」

「さて、脱線していたが今日の議題について皆の意見を言って欲し

い

「そもそもその話は本当なの？ 私は見たこと無いんだけど……」

「わ、わたしは見た事あるよ？ とっても楽しそうに話してたよ？」

「俺は……ないな。」

「まあその日はお前達にお使い頼んでたからな」

「確か……オイ！ 俺に鉄扇てっせんなんか買いに行かせてたよな？ そんなもの見つかなかったけどな」

ああ、そんな物を頼んだ記憶があるね。

因みにカリンにはそんなかわいそうなことはしないよ？ 本当だよ？ そんなことするのは今のところアッシュ（弄られ訳）だけだよ？

54

「そうだな……じゃあ居ると考えて、またお互いに憎からず思っている」と想定して議題を進めるぞ」

「そのことなんだけどさ？ アッシュはお母さんがその人と付き合いうのは賛成？ それとも反対？」

「何を馬鹿なことを！ 母さんが好きになった人なら無論賛成だ！ まあいずれ顔合わせするだろうし、その時にその人の性格とかはわかるだろ」

「まあアッシュならそう言っつわよね……あなた達は？」

ん？ 進行役取られてるじゃないかだって？  
別にいんでね？ 積極的に参加するのはいいことだよチミ。

「俺も母さんが幸せになれるなら賛成だぞ」

「わたしもお母さんが幸せになれるなら……」

「ふむふむ、じゃあ満場一致で賛成ってことでおk？」

「私もいいと思うよ」

「じゃあ今度会った時にでも支援しますか。それでは今日の議題は終了！ 歯を磨いて寝るように……解散！」

血の繋がってない俺らを大切に育ててくれている母さんだ。  
幸せになってもらわなきゃな……。

side フレン

どうも、僕の名前はフレンと言います。僕には好きな人が居ます。  
その人は孤児院の運営者のマリアさんという人です。  
その人は美人であり、周りの人の心を暖かくさせるような雰囲気  
いつも纏まとっています。

その人を見かけたのは、軍を足の怪我により退職して、どうしよう



か考えているときに偶々（たまたま）見かけました。

町の通路を通っているときにすれ違いましたね、その時私には彼女のことが……笑わないでくださいね？

その……天使に見えました。そうして立ち止まって彼女がこちらに向かってくるのを呆然と見ているとですね、見ている私に気付いたのか微笑みながらお辞儀をしてくれました。

もうイチコロでしたね。その日から私は彼女のことですごい頭がいっぱいになりましたよ。

そんな日から幾日も重ねた後、八百屋に買い物に出たときにまた会いました……その時に思い切って話かけてみました。

「きき今日は、いい天気ですね？」

つい緊張してしまいましたね。恥ずかしながら噛んでしまいましたよ。

彼女は僕の言葉を聞いてキョトンとした後、微笑みながら

「そうですね？ 今日もいい一日になりそうです」

って返してくれました。本当、その時は天にでも昇る勢いでしたよ。そんなことが切欠で、彼女、マリアさんと仲良くなることが出来ました！

そして明日、なんと彼女の家を招待されてしまいました。もう嬉しすぎて明日が待ち遠しいです。

side out

今日は母さんの友達が来るらしい。まあ例のあの人（魔法学校の禿に非ず）が来るのだろう。

母さんも今日はいつても以上に明るいし……。じゃあ早速作戦会議と行きますか。

「今日に、例のあの人が来るらしい。皆することをわかっているな？」

「その人を見極める、悪い印象を与えないみたいな感じ？」

「俺が話しかけてみるから普通に過ごすのも可だ」

「じゃあ俺は観察だけでいいや」

「わたしは……どうすればいいのかな？」

「ベルは私と一緒に居ましょ？」

「よし！ 考えは纏まったな？ それでいくぞー!!」

• •

・ ・ ・ ・

まあそんなこんなで、今男の人が母さんと話してるぜよ。  
見た感じ好青年だし、裏表もなさそうな人だな？  
母さんとの相性も良さそうだし……。

アツシユが周りの子供達に視線を巡らせて見ると、皆親指を立てていた。

いやなぜアイギスまで？ いや、家族だから……愚問だったな。

「じゃあ今日はもう帰ります。君たちも急にお邪魔しちゃって悪かったね？」

周りへの気配りもgoodだな。これなら……

「いえいえ、未来の義父さんとなる人かもしれないし」

「!?!?!? ゴホゴホツ!!」

おやおや初心だね？

「アツシュ！？ 急にそんなこと言っちゃ駄目でしょう？」

母さんも否定の言葉はなしか……。こりゃもう確定だね？

「いや、いいですよ。アツシュ君だよ。嬉しいけどまだ先のこととはわからないよ」

こちらも否定の言葉はなし、相思相愛か。YATTANE！

「そうですね（ボソツ）でもあなたならいいと僕たち家族は思っています」

「はは。（ボソツ）僕も君たちの家族になりたいとは思っているよ」

「あらあら。もう仲良くなったの？」

「はい、ここに居る子は皆いい子の様なので……。それではお邪魔しました」

皆応援しているから頑張ってくださいよ？

この三カ月後、正式に義父さんことフレンは、俺たちの家族になりました。

優しいお父さん……尻に敷かれるんですね解ります（後書き）

これで家族は今のところ全員かな？

フレンが軍に所属していたならアッシュの軍入りがしやすいかなと思っただけそういう設定です。

この後キャラ説明を一本挿んだ後、軍学校編に行きます。

誤字・脱字、感想がございましたらよろしく願います。

## 設定集（前書き）

設定集

自分の中のキャラ設定を載せていきます。  
とばしてもぜんぜんおkです。

## 設定集

名前を見てきて気付いた人が居るかもしれませんが、作者はテイルズ結構好きです^^。

アッシュ・・・そのまま（しかし私の中の主人公は某ファントムの方）

マリア・・・聖母マリアから（テイルズ関係なし）

カリン・・・私のボーイツシユなキャラの想像から（テイルズ関係なし）

ロイ・・・ロイドから（シンフォニアの主人公から）

ベル・・・藤林すずから（赤ずきんちゃちゃのお鈴 SFC版ファンタジアの服部すず PS版以降の藤林すず 鈴ベル（今ここ））  
フレン・・・そのまま（ヴェスペリアの主人公ユーリの親友）

くアッシュく

今作の主人公。

イメージはエカルライトを使うあの人。

性格は仲間のためならどこまでも非道になれるが、基本はお人好し。そして底抜けに明るい性格。

メカニックで、どんな物でも創れるといっても過言ではない。

使用武器は『がるぐる』などに登場する潤愛用武器の二刀？チエンソー。または、銃やアニメ武器（基本はガンダムかな？）

くマリアく

主人公の母親代わりの人。

髪は肩ぐらいまであり、茶髪。

性格はおっとりした人。または、のほほんとした人。さらには、全てを包み込むような人と三拍子揃っている。

家事のことならドンと来いのスペシャリスト。

使用武器？はフライパン（お母さんの武器ですねわかります。しかし、リプレママは麵棒だった気が……w）

～カリン～

マリア家の長女。

髪はポニテにされていて、茶髪。

性格はボーイッシュ。アッシュ至上主義。だからと言って家族を蔑ろにするとかいったことはまったく無く愛している。

頭が良くアッシュのメカ創りのサポートをしている。

使用武器は基本は拳と足。しかし籠手や脛当てを装着しており、そこから衝撃波を出し、インパクト時に外側だけでなく内側からもロボロにするエグイ装備を用いる。

～ロイ～

マリア家の次男。

髪は短髪で切りそろえられていて、黒髪。

性格は勝気。そして、なんだかんだで優しく、文句を言いつつ頼まれたことはちゃんとする。家族思い。

頭が良くアッシュのメカ創りのサポートをしている。

使用武器は盾。盾で兎に角どつく。ギミックも沢山あり、全てはアッシュとロイしか知っていない。



くベルく

マリア家の次女。

髪はボブの黒髪。

性格は内気。しかし、親しい物にはその傾向が薄い。家族思いであり、兄思い。

頭が良くアッシュのメカ創りのサポートをしている。

使用武器は銃。魔力を固めて打ち出すので、強さは自由自在。

くフレンく

マリア家のお父さん。

髪は短髪でツンツンしていて、金髪。

眼鏡をかけている。

足に怪我を負っているが、歩けないほどではない。

性格は優しくお人好し。いい人。家族思い。

発想力が高く、アッシュに色々と案を提案している。

使用武器はロングソード。ギミックは特になし。しかし、上記の理由により戦うことは稀。

## 設定集（後書き）

取り合えずこんな感じかな？

思いついたら順々に増やしていきます。

エルカライト エカルライト

はんぺん食べたい様誤字の報告ありがとうございました！

受験が近づいてきたので、さらに投稿が遅くなると思います。  
しかし、投げるつもりは無いので気長にお待ちください。

可愛い子には旅をさせよ……可愛い子俺！？（前書き）

皆さん久しぶりです！

本来ならネギまの方を更新すべきだと思いましたが、こっちの方が少ないので増やすために受験勉強そーい！して更新しますw

可愛い子には旅をさせよ……可愛い子俺!?

「アツシユ、頑張ってきてね!」

「薦<sup>すす</sup>めた僕だから言っけど、君なら絶対受かるよ」

今実は門出なんですよね。  
ダイジエスト……行つとく?

YOU! 軍に入っちゃいなYO!

めんどい、知らん、どうでもいい!

そんな事言わずにDO?

・  
・  
・  
・  
・

アツシユ! 今日も私とお風呂入る?

いつも入っているかのように言っんじゃありません!  
ハッ?! 性<sup>エロス</sup>からの逃走理由ができる!!

・ ・ ・ ・ ・

人付き合いは大切ですよね！

よっっし！ アツシュ張り切っちゃうよ？

受験日 今ここ

「もちのろんだよ！（死語？）やるからには受かってみせますとも！！」

「アツシュ……もし受かつちゃったら……そんなのダメ！落ちてね！」

「おい姉貴！いくらなんでもそれはダメだろ……」

「ロイ君の言うとおりだ！そして俺は絶対に受かる（キリッ）」

「アツシュお兄ちゃんががんばって！」

「ベルは本当にいい子だね。アメを進呈します！」

「行ってらっしゃい！ であります」

「おう！ アイギスとラゴウも家族の事頼んだぞ！」

名残惜しいけどそろそろ行くとしますか。

「じゃあ行ってきますー！」

幸せの”ぬ”のハンケチで目元を吹きながら出発。

「行ったね……」

「ええ……でもアッシュなら平気よ！ だって私とあなたの息子だもの」

「そうだね。さて、僕らも家に入るつか」

「」「」「はーい」「」

・  
・  
・  
・

・ ・ ・ ・

さて問題です。私は今どうしているでしょう。

? : 歩いている

? : 走っている

? : 黄昏たそがれている

さあどれ！ 正解は……

「うひょ〜！ 空からの風景は何時見てもいいね！」

空を飛んでいる！ でした〜。

飛び方は簡単。丸いボードに乗ってバランスを取るだけ！ ね？  
簡単でしょ？

因みに丸いボードとはグルグルに出てくる中心に水晶が埋め込まれているあれ。

この世界には魔力があることがわかってから色々な実験の過程で出来た物なんですな〜これが。

魔力があるらしいでっせ。

なんか発電機なので自家発電できない？

出来た！　　そういえばこんなあったな……よし！　　創るか。

出来た！　　風が気持ちいいぜ！　　今ここ

そうこうしているうちに到着！！

side　赤髪の少女

今日私は村の人に送り出されてここにやって来ました。

身寄りの無い私のために色々世話を焼いてくれて、尚且つ私のために費用を出してやるからなんてこんな事まで……。

絶対に受かってみせます！

そう決意を固めていたとき……

「到着！」

空から男の子が登場してしまいました……なんで!?

side out



「到着！」

いや〜よかったね〜。ん？

「どうした其処おなじの女子よ」

なんか吃驚してたからつい話しかけちゃったぜ！

いいね〜友達100人計画の第一歩だね！

まあする気はないんですけどね〜。正直友達は信頼できる子とか面白い子とかだけで十分とです。

「どうしたって……君今空から来ましたよね！？」

おっと俺とした事が……。

「俺の名前はアッシュって言うんだ！　そう呼んでくれ」

「あ…アッシュ君って言うんですね。私の名前はアティって言います……って違います！」

「なんだ？　挨拶は大事だぞ？」

「そうなんです！　そうなんですけど…！」

いいね！　すごくいい！！　ツッコミ友達は大事だね！

「そんなことはどうでもいい！俺と友達になっちゃいなよYOU  
！」

「どうでもいいって……友達になるのはいいですけど……」

あり？ 反応が悪くない？

「まあいつか。アツシユ君、折角友達になっただんですから合格しま  
しょう！」

ん？ んゝ、ん？

「そっか、俺受験で来たんだっけ？」

「目的忘れてる?!」

しまんないね？ 仕方ないね？

可愛い子には旅をさせよ……可愛い子俺！？（後書き）

というわけでアテイとの邂逅でした。

ヤバイ……設定忘れてるWWW

これからも出来るときに更新します！ 因みに感想の方はきていれば普通に返せると思います！

……感想があればですがW

誤字・脱字、感想等があればよろしくお願いします。

テストって聞くと途端に眠気が来るのは俺だけじゃないはず!! (前書き)

なんとなくネタが浮かんできたので更新  
受験なのに何やってるんだろ俺WWW

テストって聞くと途端に眠気が来るのは俺だけじゃないはず!!

### 軍学校入学試験

Q1

『武器はどんな分類に分けられるか答えよ』

A

『近接武器：剣・短剣・斧・爪 e t c .

遠距離武器：銃・弓矢・投げナイフ・クナイ e t c .

間接武器：槍 e t c .

しかし、短剣や投げナイフ、槍といったものは状況によって使い分けが変わる』

Q2

『サモナイト石の種類の数答えよ』

A

『5つ』

Q3

『島でのサバイバルでまず優先すべきことを答えよ』

A

『長期を想定するならば飲み水、短期を想定するならば狼煙のための道具』

Q4

『Q3の時に余裕があればしておきたい事を答えよ』

A

『地形の確認と其処に生息する植生の確認。更に出来れば生物も調べられるとなお良い』

Q5

『好きな隊員が水浴びをしていたら?』

A

『体が勝手に……』

Q6

『相手が武器を使つなら?』

A

『こちらは霸王翔吼拳を使わざるを得ない』

Q7

『アサシンが敵として出たら?』

A

『汚い! さすが忍者汚い!!』

Q8

『アイテムを使用したら?』

A

『アイテムなぞ使ってんじゃねえ!』

Q9

『あたいったら?』

A

『最強ね!』

Q10

『俺は悪くねえ!』

A

『ヴァン先生が悪いんだ! 俺は親善大使だぞ!』

.....

ハッ?! なんか凄いテストを受けた気がしたが.....それにコピーが何か言ってた気が.....。きつと気のせいだよな? なんとって軍の試験でそんな.....。

「あ! アッシュ君! テストどうでした?」

アティさんは元気やの〜。

テストって受けた後のダルさって寝てたから来るもの？ それとも頭を使ったから来るもの？

俺としては前者？ そんな気がしてならない！！

「お〜お〜アテイさんは元気やの〜。わしはもう疲れて疲れて……」

「何で疲れきっておじいさんに……ってアツシユ君！ 涎の後が！」

なん……だと？

「ばれちゃ〜しかたない！ 何を隠そう即効で終わらせて寝てたのら〜」

「そんなんでいいんですかテスト!？」

「テスト⇨寝る時間！ お偉いさんにはわからんです！」

「何サムズアップしてるんですか！ しかもテストは寝る時間じゃありません！ ……でもその様子なら大丈夫なようですね」

「我輩の辞書に不可能という文字は無い！ しかし辞書が無い!!」

「誇るところじゃありません！」

アテイって……面白！

こういう人がいると毎日が楽しいよね！ 友達になってよかったぜ！



「まあいいじゃないの！　ところで合否判定って何時出るん？」

「合否判定ですか？　それなら夕方ですね。それまでどうしています？」

夕方……か。今はお昼だし取り合えず……

「飯行かね？　腹が減ってゲシュタルト崩壊を……奢るぜ？」

「そんな大げさな……行くのはいいですけど別に奢りはいいですよ」

「おいおいアテイさんよ。こういう時は男を立てせる所だぜ？　それによく言うだろ？　男は財布だつて」

「言いません！　でもじゃあ……奢ってくださいませんか？」

うおっ？！　まさかの上目使い！！

しかも天然だぞ！？　こいつには勝てない！　メディック衛生兵！　衛生兵！！

「お……おっ／／／」

「どうしたんですか？　顔が赤いですよ？　もしかして風邪ですか  
！！」

「違うわ鈍感！　ええい離せ！　離さんか！！」

「ど……鈍感？　私そんなに鈍感じゃないですよ？　それに大丈夫です。私は医学も志望しているので、ある程度の知識はあります」

「的外れ！　圧倒的外れ！！　俺が言ってるのはそういうことじ

やない！ 赤髪の天然は化物か！！」

「じゃあどういふことなんですか！？」

「何でもない！ さっさとどっかに食いにいきましょう！」

まったく……俺としたことが先行を許しちゃった。

天然って怖いんだな……いや、カレンのような計画された行動も怖かったな……。

結論！ 女性は怖し！ 恐いんじゃない！ 強<sup>こわ</sup>くて怖いんだ！

世の男性が尻に敷かれるのは当たり前だったのか……俺は逃げる！

でも尻に敷かれたほうが上手く行くってよく言われてるよな？

お……俺はどうすればいいだああああ…… ドップラー効果

ファミレス到着！ いや別にファミリーじゃないけどな。

そう言えば言語は 同じなのに何で とは文字が違うんだ？

まあ今考えても詮無き事だがな……。

「さて、何を食べる？ 別にメニュー全部でもいいぜ？」

「そんなに食べられません！」

「高いもの一択！ とかでもいいのに〜」

「そんなにガメてもいません！ じゃあこのパスタを」

他人の金で食う飯は最高額のもの一択じゃないのか……。  
アテイだからか 偏見

「あ、其処のお姉さんすいませーん。」

「メニューがお決まりでしょうか？」

「そうです。え〜とパスタが一つにこの丼物を一つ、それで後から  
デザート蘭に書いてあるの全部お願いします」

あれ？アテイさんと店員さんがフリーズした……。

まさか変な注文の仕方だったか！？ こいつ田舎もんじゃんだっさ  
くみたいな？！

畜生！ マナーに無学な弊害が！

「本当に全てでよろしいのでしょうか？」

「はい。デザートと思われるもの全部お願いします」

「か……かしこまりました。少々お待ちください」

ふう。大丈夫そうだな……。

こいつ餓鬼がきなのに金持ってんのかよ的な心配でもしたのかな？

「ほ……本当に全部ですか？」

「ん？ どうしたのアテイ？ ……もしかして足りなかった？  
「ザス！ 俺としたことが女性の要望に答えられないなんて……紳シエン  
士トルマン失格か」

「いえ、むしろ多すぎませんか？」

何言っただこの人？

古来から言われてるじゃないか

「デザートは別腹って言うじゃん？」

「言いますけど！ 言うんですけど……！」

「本当にどうしたの？ 大丈夫だよ。俺だってデザート好きだから  
沢山食べるし」

「そうですか」

顔引き攣らせるほど多いのか？

まあいつか。二人分には少ない位かもしれないし……。

・ ・ ・ ・ ・

「結構話し込んだんじゃないか。じゃあ行きましようか」

「そっだね」

そのまま話が弾んじゃって結局時間近くまでファミレスに居たよ？  
ちゃんとデザートおかわりもしたし、迷惑客じゃないよね？

「私達受かっていますよね？」

「心配なの？ 大丈夫大丈夫」

「そんな根拠の無い励ましされても……でもそうですね。今更ですからね」

「そっそう。ちゃちゃっと見て合格確認しよう」

「そっですね」

なんて言っている間に到着

え〜と俺の番号は1304……改めて不吉な数字が二組も（汗）  
関係ないったらない！どれどれ……お？ あっただぜ。

「俺のはあつたけどアティは？」

「私もありました！ これからよろしくお願いします！」

「こちらこそ！ じゃあ早速帰って荷造りしね〜と。また3日後に  
会おうぜ」

「はい!!」

二人はお互いに手を振り、別れを告げて家路に着いた。

テストって聞くと途端に眠気が来るのは俺だけじゃないはず!! (後書き)

結構書けたかな？

因みにドゥプラー効果とは救急車などで見れるあれのことです。

物理でやるんだけど……常識かな？

誤字・脱字、感想等がありましたらよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0637r/>

---

召還する者と創り出す者

2011年10月22日17時36分発行